

# 建設汚泥を自ら利用

## 鹿島建設／泥土リサイクル協会

### 京都の高速道路工事現場で即時改質

(一社)泥土リサイクル協会は、7月26日に鹿島建設・新名城陽工事事務所において、高圧噴射攪拌工法の排泥処理の現場見学会を開催した。同工事は鹿島建設が西日本高速道路(NEXCO西日本)から「新名城陽道路」を受注。京都府城陽市内の約3・7キロにわたる工区で、地盤改良等に伴って発生する大量の建設汚泥を自ら利用すべ

く、(一社)泥土リサイクル協会(愛知県稲沢市、木村孟理事長)に支援を要請した。

同工事における盛土り土は、地盤改良の体積の約3割に上る見通しで、従来の場外産廃処理では膨大なコストが発生するだけにならず、調泥槽に送られた建設汚泥を攪拌することで、性状を均一なものとする。その後、パ

ツ迅速な改質処理を実施し、品質を確保したうえで本線流用する必要があることから、同社は泥土処理に関して、(一社)泥土リサイクル協会の助言や協力を得ることとした。

加。特殊連続ミキサで攪拌し粒状に生成してから、石灰系固化材を混ぜて改質を行う流れ。建設汚泥の改質に用いる泥土処理装置や石灰系固化材等は、全て同協会会員による装置・製品を採用。計3カ所に泥土処理装置を設け、日量1000立方メートルの改質処理を可能とした。

泥土の投入から改質に掛かる時間は、約30秒と短時間で済む。また、大きな強み。また、処理土のコーン指数は1300キタ/平方メートルと高い品質を確保する。

新名城陽道路城陽工事で発生する大量の建設汚泥をリサイクルし自ら利用した場合、従来の場外処分と比較、CO<sub>2</sub>排出量を大幅に削減でき、経済効果としては、購入土の材料費を抑え、処分費

用を低減できることから、コストを削減できるといふ。現場見学会では、(一社)泥土リサイクル協会の野口真一事務局長が、全国の建設汚泥の工時間利用推移や土木・建築別の現場内利用推移などを解説。建設汚泥の再資源化率が2018年度時点で94・6%と高水準にあるもの、再生材が活用されなければ環境負荷が低減できているとは言えないと述べ、「泥土処理計画におけるポイントとして、安定した品質が継続して満足できる技術を選定する」とも、施工管理および品質管理を徹底して監理する必要がある」と強調した。

先のプロントの処理能力が不足する等の懸念があった。そのため、現場内において適切か

改質処理手順は、まず、調泥槽に送られた建設汚泥を攪拌することで、性状を均一なものとする。その後、パ

ツ迅速な改質処理を実施し、品質を確保したうえで本線流用する必要があることから、同社は泥土処理に関して、(一社)泥土リサイクル協会の助言や協力を得ることとした。

加。特殊連続ミキサで攪拌し粒状に生成してから、石灰系固化材を混ぜて改質を行う流れ。建設汚泥の改質に用いる泥土処理装置や石灰系固化材等は、全て同協会会員による装置・製品を採用。計3カ所に泥土処理装置を設け、日量1000立方メートルの改質処理を可能とした。

泥土の投入から改質に掛かる時間は、約30秒と短時間で済む。また、大きな強み。また、処理土のコーン指数は1300キタ/平方メートルと高い品質を確保する。

新名城陽道路城陽工事で発生する大量の建設汚泥をリサイクルし自ら利用した場合、従来の場外処分と比較、CO<sub>2</sub>排出量を大幅に削減でき、経済効果としては、購入土の材料費を抑え、処分費

用を低減できることから、コストを削減できるといふ。現場見学会では、(一社)泥土リサイクル協会の野口真一事務局長が、全国の建設汚泥の工時間利用推移や土木・建築別の現場内利用推移などを解説。建設汚泥の再資源化率が2018年度時点で94・6%と高水準にあるもの、再生材が活用されなければ環境負荷が低減できているとは言えないと述べ、「泥土処理計画におけるポイントとして、安定した品質が継続して満足できる技術を選定する」とも、施工管理および品質管理を徹底して監理する必要がある」と強調した。



建設汚泥の改質現場



現場見学会の様子